

愛知県下における須恵器生産と流通

城ヶ谷和広

はじめに

愛知県は猿投窯、尾北窯といった巨大な須恵器生産地を抱え、隣接してすぐ西側に美濃須衛窯、東側に湖西窯が存在するといった全国でも有数の須恵器生産卓越地域である。須恵器の研究は昭和30年代前半の愛知用水工事に伴う猿投窯の調査がおこなわれて以来、生産の立場からの研究が先行し、その成果は猿投窯編年としてまとめられ、全国的な基準資料の一つとして用いられてきた（樋崎・斎藤 1983など）。

一方、消費遺跡については、古墳出土遺物を中心とした研究が行われてきたが（樋崎 1958など）、まとまった集落遺跡の調査事例が少なく、その様相はよくわからなかった。しかし、平成期に入ると大規模な集落遺跡の調査がいくつも行われるようになり、その成果も明らかになってきている。たとえば愛知県埋蔵文化財センターが調査した遺跡で、尾張北西部では東海北陸自動車に関連した一宮市大毛池田遺跡、大毛沖遺跡、門間沼遺跡、八王子遺跡など、三河では第二東海自動車道に関連して豊田市水入遺跡、郷上遺跡、今町遺跡などがある。

本稿ではこれらの成果をもとに、愛知県下における須恵器生産と流通の問題について検討する。この問題については以前、土師器を含めて大枠について示したことがあるが（城ヶ谷 1997）、その後三河を中心とした研究会での成果^(註1)や土師器研究の進展^(註2)などもあり、再度検討する時期にきている。また、近年様々な遺跡で須恵器を見る機会があり、その際の知見

なども踏まえて、特に5世紀半ばの猿投窯における須恵器生産開始前後の状況と7世紀後半以降の猿投窯、尾北窯、美濃須衛窯、湖西窯といった大規模生産地の興隆に伴う流通状況の変化を中心にして考察してみたい。

愛知県下における須恵器の生産と流通状況

（1）須恵器生産の開始～5世紀半ばの状況

まず、愛知県に須恵器が出現する時期の様相についてみてみたい。具体的には猿投窯に須恵器生産が始まる東山111（H111）号窯期前後の時期で、いわゆる初期須恵器の段階である。

生産地の動向

愛知県における須恵器生産の開始は5世紀前半に遡るといわれている（斎藤 1995他）。現在、猿投窯で最も古いと考えられている窯は名古屋市昭和区にあった東山111号窯である。現在は滅失しているが、名古屋大学により灰層末端の調査が行われている（斎藤 1983）。東山111号窯から出土した須恵器は蓋杯の形態（たとえば図1-5）、多孔透かしの無蓋高杯など大阪府陶邑窯に見られない特徴を有しており、直接比較するのは難しいが、陶邑窯編年のI-2段階、TK216型式頃に併行するものと思われる。

しかし、名古屋市中区伊勢山中学校遺跡・正木町遺跡や西区志賀公園遺跡などの消費遺跡においては韓式系土器、陶邑窯系の初期須恵器に混じって、別の胎土を持つ一群の須恵器が出土している。これらの須恵器は胎土、技法などから、猿投窯の製品である可能性がある。しかも、形態や技法などを比較すると東山111号窯より

（註1）たとえば、1999年三河考古合同研究会「古墳時代の猿投窯と湖西窯」、2000年東海土器研究会「須恵器生産の出現から消滅」など須恵器の生産と流通をとりあげた研究会があった。

（註2）尾張では赤塚次郎、早野浩二らによる土師器研究が進み、今までよくわからなかった5世紀の状況が土師器からも検討できるようになった（赤塚・早野 2001）。

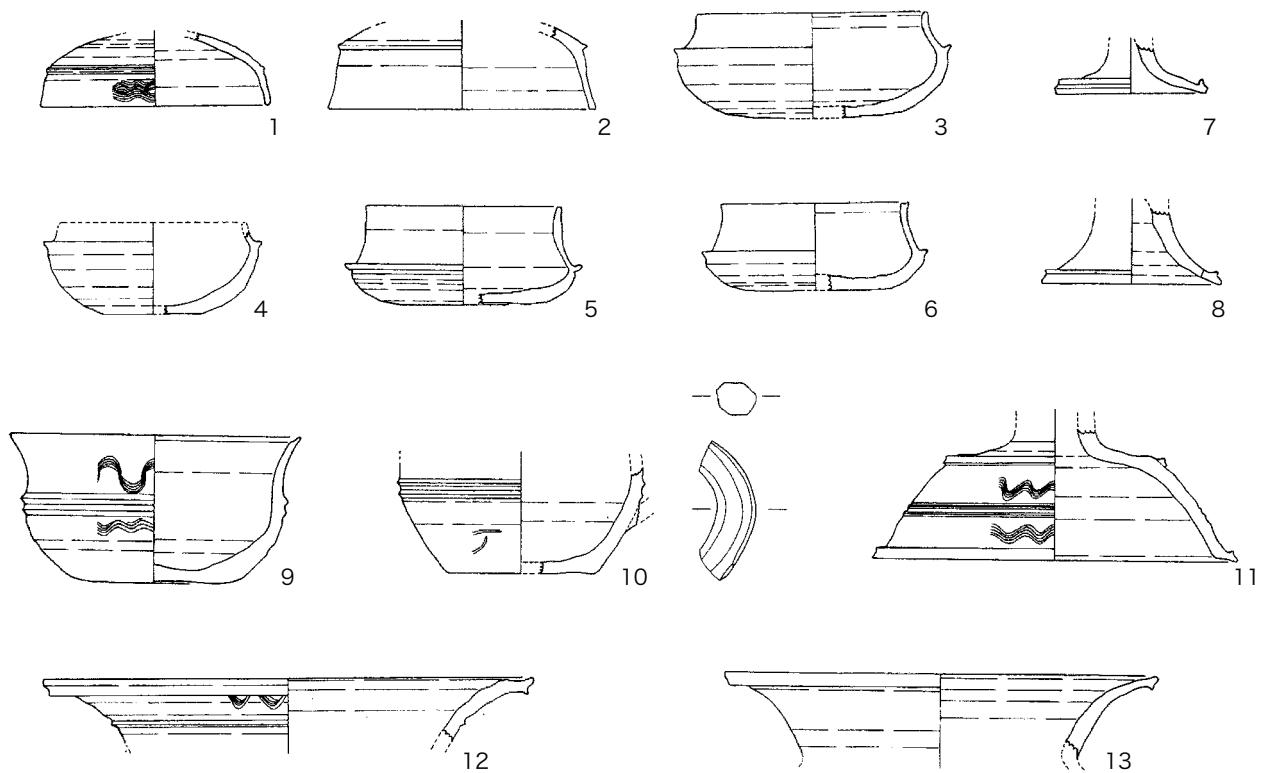


図1 東山111号窯出土須恵器(1:4)

古い特徴を持つものもあり、まだ見つかっていないが、猿投窯でもう一段階古い窯があつたことを推定させる。また、伊勢山中学校遺跡第5次調査の土坑SK108からは5世紀前半と考えられる宇田I式（赤塚・早野2001）の土師器高杯（図2-1、2）とその形態を模倣した須恵器高杯（図2-6）がそろって出土している（木村光一1996）。これは須恵器生産導入に当たつて土師器製作者がかかわっていることを示唆するものであろう。

東山111号窯に続く窯として、500mほど北の丘陵に東山48（東山218）号窯が築かれる（荒木1994）。形態的には東山111号窯の特徴を引き継いでいるが、蓋杯等の波状文が少なくなり、高杯の透かしの数も減少する。陶邑窯ではTK208型式（ON46型式）に相当するものと思われる。

5、6世紀の窯は猿投窯でもほぼ東山地区内に限られることから、東山窯とも呼ばれることがある。中でも初期の窯は山崎川上流の狭い範囲に限定される。この時期は窯の数も少なく、生産は1時期に1基、多くても2、3基程度が

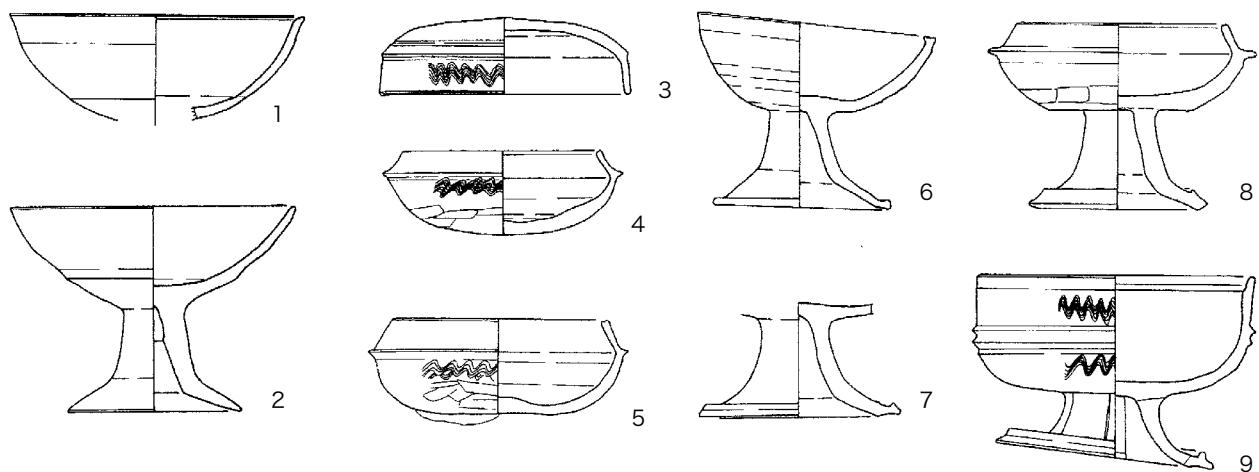
稼働するような小規模で限定的なものであったと思われる。また、5、6世紀代の窯は埴輪を併焼していることがほとんどで、在地勢力とのかかわりが想定される。

消費地の動向

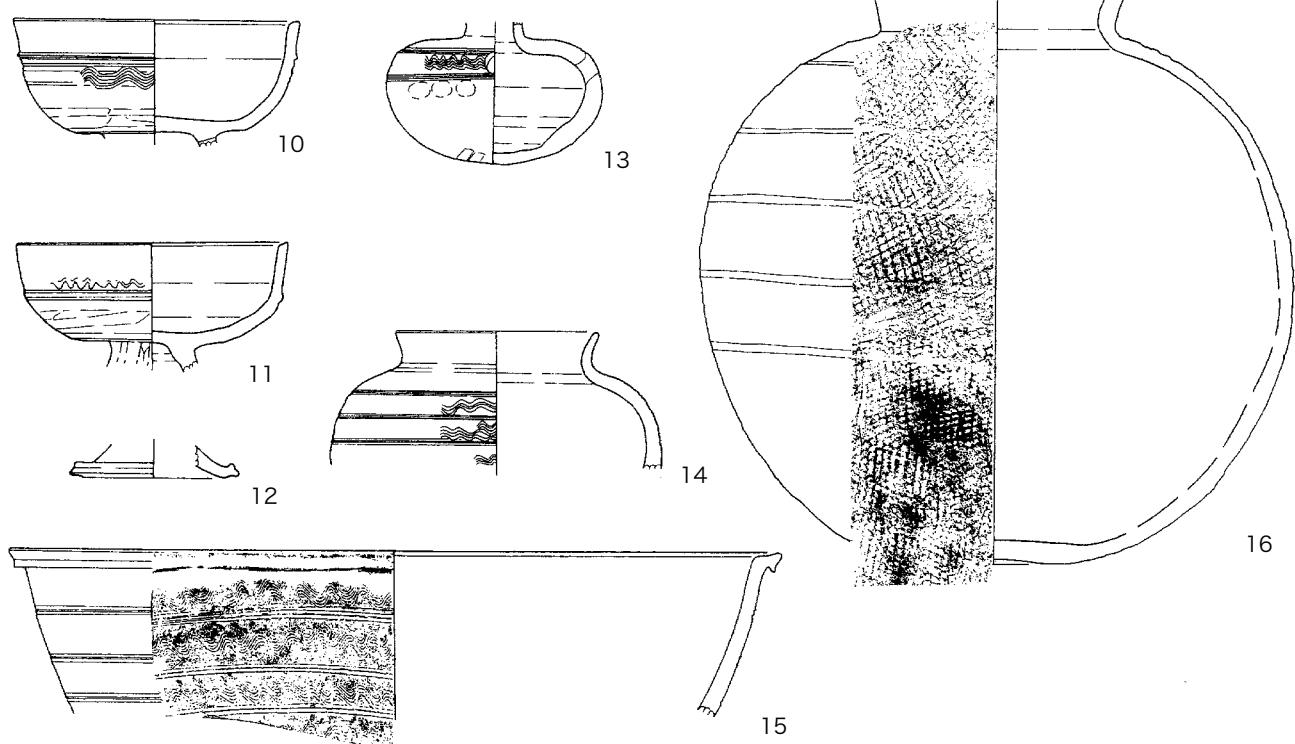
H111号窯期前夜

先に述べたように県内最古の須恵器群を出土する伊勢山中学校遺跡、正木町遺跡は熱田台地西端にあり、隣接して所在する。これらの遺跡は古代を中心とする尾張元興寺遺跡も含めて「古渡遺跡群」とも呼ばれ（木村有作1999）、1.5kmほど南に東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳や熱田神宮が所在する中核的な集落遺跡であったと思われる。このなかで、伊勢山中学校遺跡SK108から出土した須恵器は胎土・形態などから猿投窯産と考えられるものが主体である。しかも蓋杯類は波状文を多用し、底部を手持ちヘラ削りで調整しており、東山111号窯のものより古い様相を呈する。また、SK108に隣接する同時期の土坑SK109からは格子タタキを持つ球胴形の体部に凹線が5重に巡る甕が完形で出土している。焼成は須恵質で

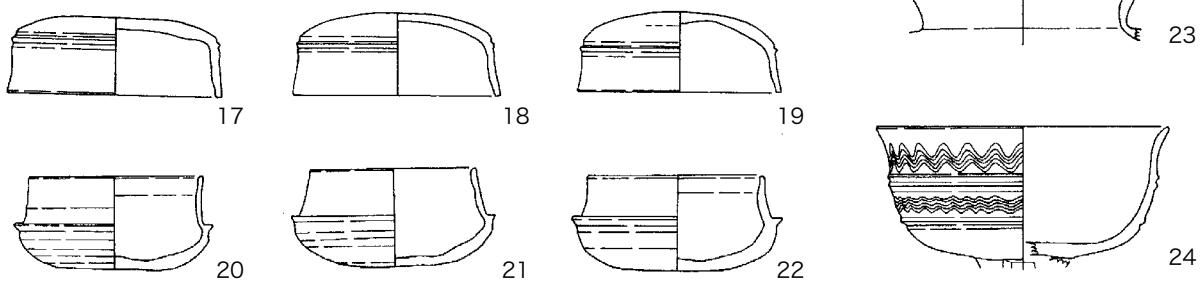
第5次 SK108



第5次 SK109



第10次 SB01



灰色を呈し、猿投窯産の可能性もあるが、猿投窯ではこの時期に格子タタキを持つ甕が見つかっていないことなどから、断定はできない。

伊勢山中学校遺跡から6kmほど北で、熱田台地を下りて、庄内川の南に位置する志賀公園遺跡からも古い須恵器の一群が出土している（永井宏幸編2001）。この遺跡では5世紀を中心としたいくつかの土器集積が見つかっている。報告ではそれらの土器集積を4期に分け、層序や供伴する土師器の編年と対比させて、1期—松河戸II式1段階、2期（陶邑窯TG232型式併行）—松河戸II式2段階、3期（TK73型式併行）—宇田I式1段階、4期（TK216型式、ON46型式併行）—宇田I式2段階としている。須恵器が見られるのは2期に該当するSU13である。ここでは土師器に混じって1点のみ繩蓆文を持つ韓式系の甕がほぼ完形で出土している。この甕は硬質で青灰色に焼き上がっているが、猿投窯ではまだ繩蓆文を持つ甕が見つかっていないので、猿投窯産であるかどうかははつきりしない。胎土や口縁部の形態などは伊勢山中学校遺跡SK109出土の格子タタキを持つ甕と類似している。次の3期に該当するSU10からは須恵器無蓋高杯、SU14からは菱形の透かしを持つ無蓋高杯の脚部が出土している。菱形の透かしは猿投窯ないことや、胎土・形態などから陶邑窯系の可能性が高い。また、SU10の高杯も形態などから陶邑窯系の可能性がある。次の4期に該当するSU11のなかには「羽釜形」を含む蓋杯、高杯、壺、器台、甕などが見られる。この遺構の須恵器群は猿投窯産が主体を占めると思われるが、中には陶邑窯系と考えられるもの（図4—11、21）もある。猿投窯産と考えられるものは東山111号窯のものに比べて若干古い様相をもつものもあるが、概ねH111号窯期と考えられる。

H111号窯期以後

H111号窯期やそれに続くH48号窯期になると猿投窯産の須恵器が各地で出土し、普及はじめたことがわかる。韓式系土器や陶邑窯系須恵器も見られるが、数は少ない。

この時期の須恵器がまとまって出土するのはやはり熱田台地周辺である。伊勢山中学校遺跡第10次調査では一辺4mの通常の竪穴住

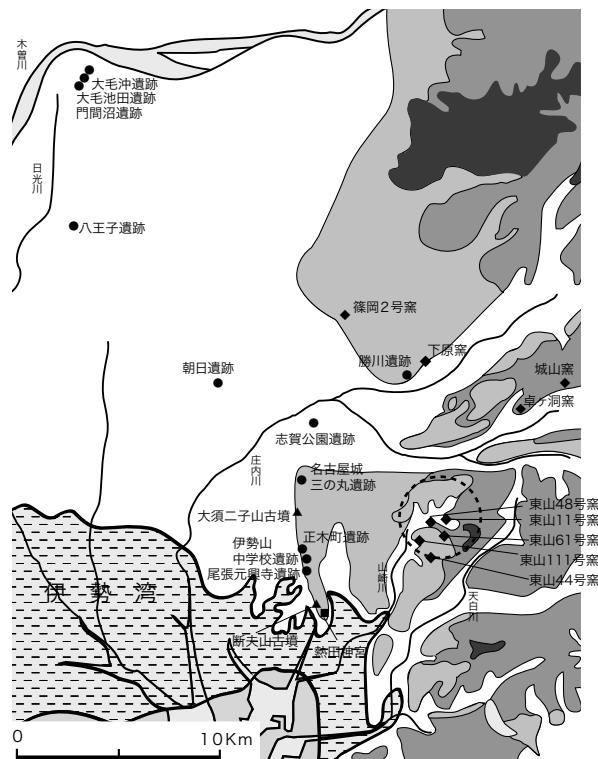


図3 遺跡位置図(赤塚・早野2001改変)

居SB01から陶質の韓式系鍋と猿投窯系の蓋杯や高杯が出土している（服部2003）。この時期の供膳具は一般的には土師器椀・高杯などであるが、この遺跡では生活レベルで須恵器蓋杯・高杯などを使っていたことがわかる事例であろう。

一方、この時期になると熱田台地周辺以外でも猿投窯産須恵器が見られるようになる。たとえば、尾張では一宮市八王子遺跡、門間沼遺跡、清須市朝日遺跡、三河では豊田市水入遺跡、郷上遺跡、神明遺跡などである。

なかでも注目されるのは豊田市内の遺跡である。水入遺跡では段丘崖と大溝から集中廃棄を含む大量の土器群が出土している。それらの土器群は層序等から4群に分けられ、それをもとにして古墳時代中期が6期に区分されている（永井邦仁編2005）。須恵器が出土するのが水入3期以降である。水入3期は土師器編年では神明式（森2001）の古い段階で、猿投窯東山111号窯期より一段階古い時期であるとされる。須恵器は1点のみ杯身が出土している（図5-1）。この杯身は胎土が乳白色を呈し、やや軟質で外面全体が黒色処理をしたように真っ黒

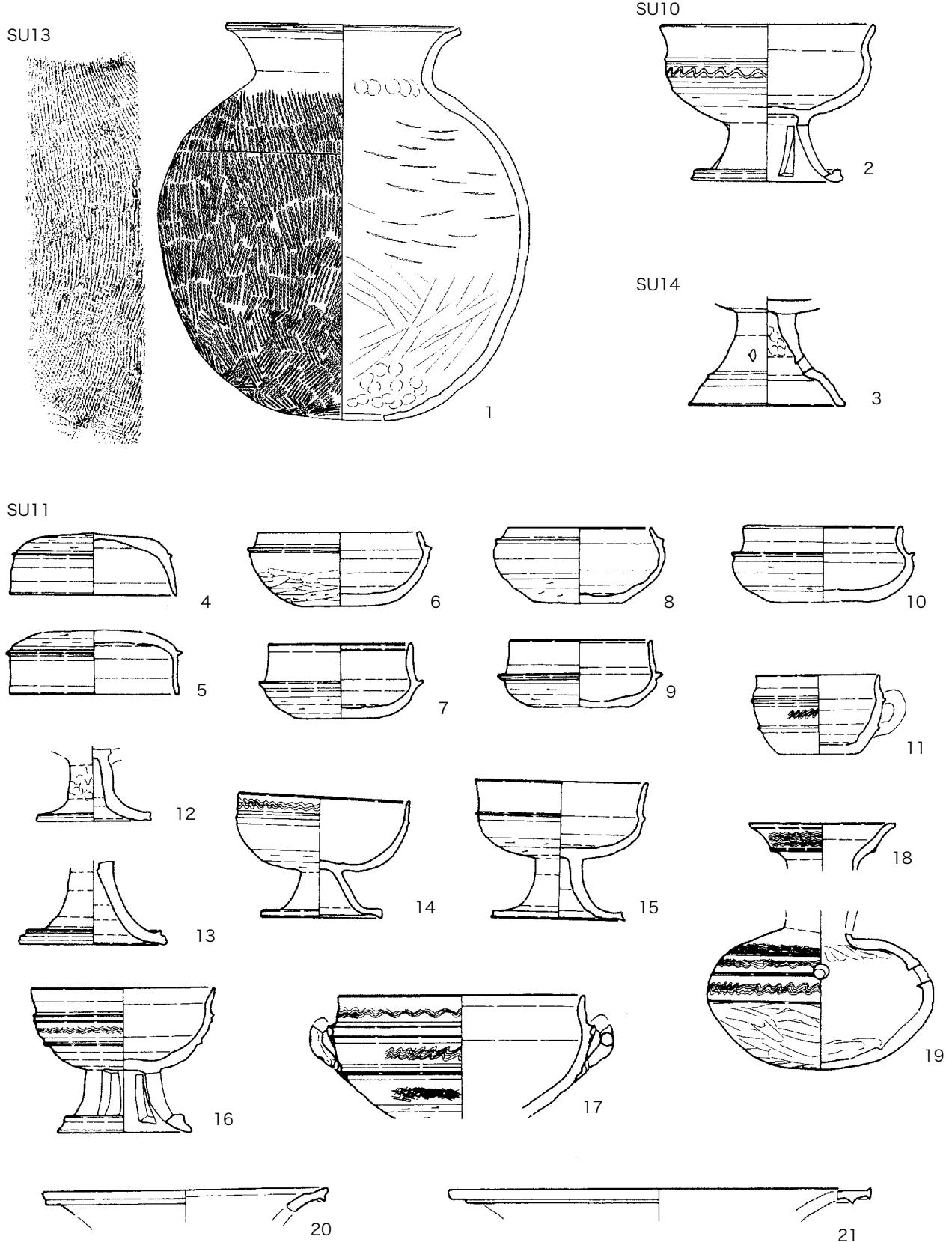


図4 志賀公園遺跡出土須恵器(1:4)

である。天井部は静止ヘラ削りで調整する。形態的には陶邑窯系の可能性もあるが、焼成状況が特殊で産地は限定できない。水入4期は99ASD01や99C2SX01などの資料があり、須恵器ではH111号窯及びH48号窯期に相当する。この時期の須恵器は猿投窯が主体であるが、陶邑窯系の製品も確実に見られる（図5-11）。これは志賀公園遺跡などで見られる状況とも共通するが、陶邑窯系の製品の割合が志賀公園遺跡よりもやや高いものと思われる。水入5期は土器の集中廃棄がみられた99CSX13を主体とするもので、城山2号窯期を中心とした時期のものである。12の把手付の椀は陶邑窯系の可能性がある。水入6期はH11号窯期から6世紀にかけての時期である。この頃になるとほとんどが猿投窯系の須恵器になる。

豊田市神明遺跡からも猿投窯と陶邑窯系の遺物の両方が出土している。報告では神明遺跡出土遺物をIV期10段階に分類している。須恵器が見られるのはII期2段階にあたるSB231、SB15で、図化できない小片が出土している。産地としては猿投窯以外の製品である可能性が高いとされ、時期的にはH111号窯期を遡らないとされる（森2001）。III期になると須恵器の量も増えるが、猿投窯系のものと陶邑窯系のものが混在する。たとえば8号住居やSB28などでは高杯や甕に陶邑窯系のものが多い傾向にある。IV期はH11号窯期以降に相当すると思われるが、須恵器はほとんど猿投窯系になる。

それ以外にも、伊勢や美濃などでも出土が見られる。たとえば、猿投窯から50kmほど離れた岐阜県関市砂行遺跡からはH48号窯期からH11号窯期にかけての須恵器が出土している。砂行遺跡からは5世紀の古墳とそれと連動した水辺の祭祀を行った砂行大溝が見つかっている。その祭祀に関わり、土師器、木製品とともに須恵器蓋杯、高杯、甕など32個体が一括投棄されており、生産地としては猿投窯系と陶邑窯系がほぼ半々の状況であるという（成瀬編2000）。このような例から見ても、猿投窯の流通圏はかなり広がっている可能性はあるが、尾張南部の中心部以外は面的な広がりではなく、特殊品としての点的な広がりであろう。

（2）須恵器生産の普及と定着

～5世紀後葉から6世紀の状況

生産地の動向

5世紀後半から末にかけて、城山2号窯期になると有蓋高杯の脚部など特徴的な要素を残しながらも、猿投窯としての独自色は薄れ、全国的な同一化の流れをたどる。このころになると古墳の築造の増加に伴い、埴輪や副葬品としての須恵器の需要が高まってくる。猿投窯ではこの需要増に対応すべく、埴輪を併焼しながら須恵器生産を拡大させていく。ただし、窯場については次のH11号窯期以降6世紀代を通して、引き続き山崎川上流の谷内に留まり、範囲をあまり拡大させることなく、管理された生産が続いているものと思われる。

一方、猿投窯から北西に10kmほど離れた丘陵に尾張旭市城山窯が築かれる。城山窯は数基からなる単発的な窯であるが、工事の直前に城山2号窯の窯体と灰原の一部が調査された。その製品は猿投窯のものとほぼ変わりないことから、猿投窯の工人が直接派遣されて生産が行われたと考えられる。城山窯の西約1kmのところにはほぼ同時期の名古屋市卓ヶ洞窯が数基築かれる。やや遅れて6世紀になると尾北地区に春日井市下原窯、三河に豊田市上向イ田窯も開窯する。各地の需要に応じて須恵器工人が派遣されたものと思われる。

また、遠江では有玉窯、衛門坂窯、星川窯などで尾張系の埴輪を併焼していることから、これらの地域でも何らかの形で猿投窯との関わりが考えられる（鈴木1994）。

このような猿投窯の動向と、ほぼ同時期に西から陶邑窯系の技術が東海全体に流れ込んでくる（城ヶ谷1997）。伊勢にはTK23型式に相当する津市久居窯が開窯し、北へ進んで、津市藤谷窯、鈴鹿市稻生窯などが築かれる。伊勢湾を東に横断して知多半島の常滑市前山窯、三河湾の東岸で豊橋市水神窯、さらに遠江湖西市明通り窯などがTK23～TK47型式にかけての時期に成立する。猿投窯を取り囲むように伊勢湾を巡り、遠江にいたる太平洋沿いに陶邑窯系の窯が展開することになる。

ところが、6世紀半ばになるとこれら新たに

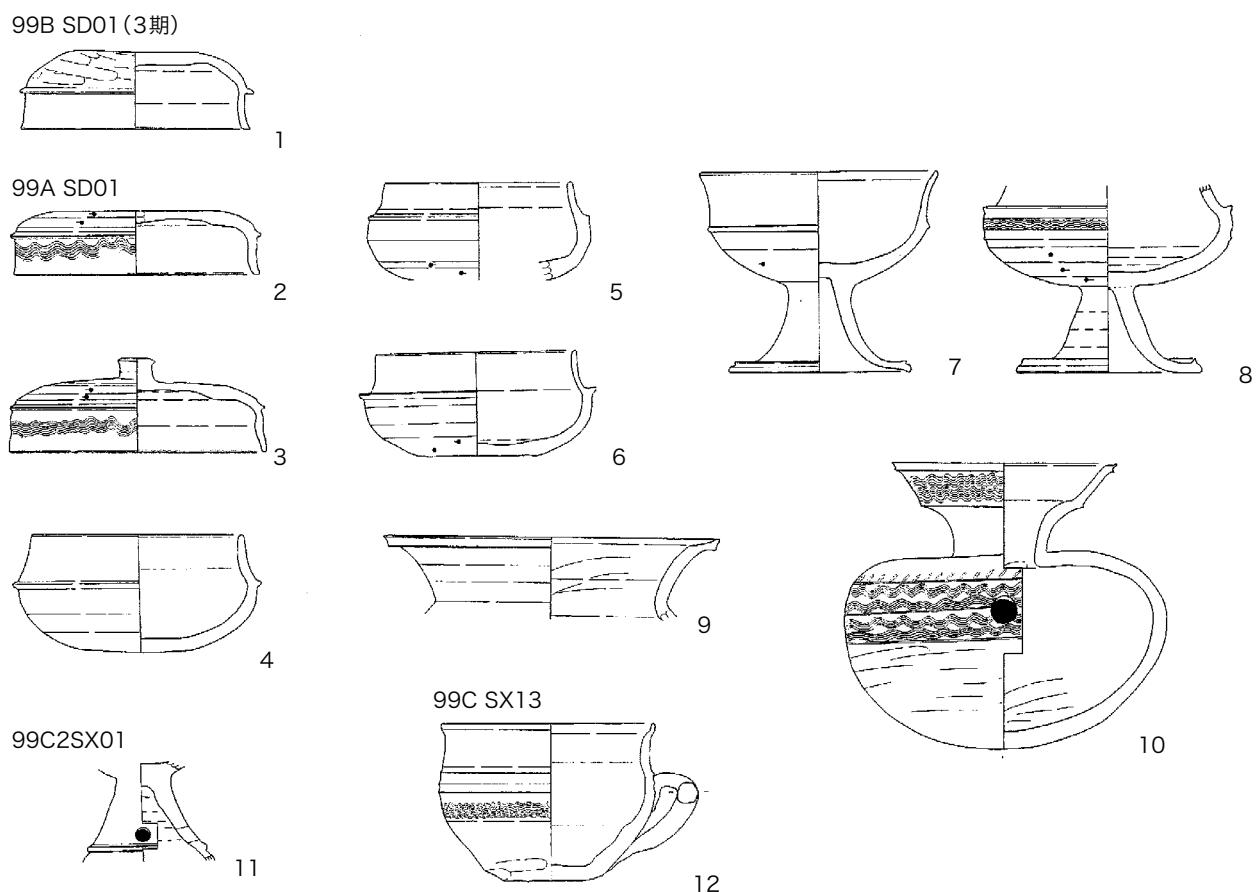
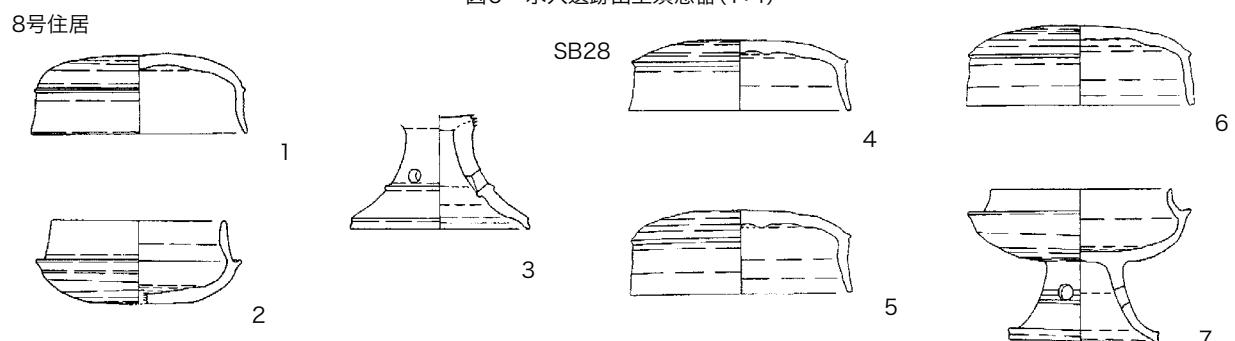


図5 水入遺跡出土須恵器(1:4)



派生した窯はほとんどが衰退してしまう。尾張においては6世紀半ばには猿投窯に生産が集約される。しかし、猿投窯においては窯場が広がった形跡は無く、生産体制に大きな変化があったとは思われない。また、6世紀後半の窯の調査事例はほとんどないので、その生産内容もわかつていない。遠江では豊橋市から湖西市にかけての三河・遠江国境付近で湖西窯が拡大し、

生産も集約されていく。

消費地の動向

この時期になると県内の一般集落にも須恵器が普及し、H11号窯期には供膳・貯蔵具が須恵器、煮炊具が土師器というように須恵器と土師器で用途による機能分化が進む。6世紀のうちには供膳具として椀や高杯などの土師器が姿を消し、ほぼ100%須恵器となる。この土師器

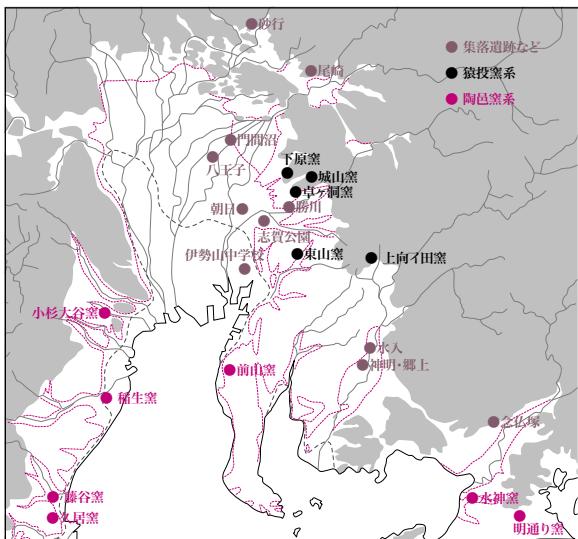


図7 古墳時代の窯と集落遺跡

を欠いた供膳具の組成は11世紀ころまで、約500年間続き、尾張・三河の特徴となる。

しかし、この時期の良好な資料は少ない。一宮市門間沼遺跡（石黒編1999）では5世紀から7世紀にかけての集落がみつかっているが、SD52からは6世紀半ばの良好な資料が出ている。須恵器は全て猿投窯系で蓋杯、高杯が基本的なセットとなり、これに壺、フラスコ瓶や堤瓶、平瓶などの瓶類が加わるのが一般的である。地域別で見ると、尾張・西三河の消費遺跡においては5世紀後葉にはほとんど猿投窯及び猿投窯系の製品で占められ、陶邑窯系の須恵器は姿を消す。東三河では5世紀代は陶邑窯系と猿投窯系の両方が見られる。たとえば、豊川市念佛塚2号墳では城山2号窯期の杯身が、同4号墳では猿投窯H11号窯期の蓋杯、高杯などが出土するのに対して、同3号墳では陶邑窯系のTK23型式に相当する須恵器の一群が出土している（小林1994）。同じ古墳群のなかでも産地に差があることがある。

その他、美濃や伊勢などにも製品は供給され、広範な流通圏を形成する（註3）。

古墳出土資料が多数あるのに対して、この時期の集落遺跡の出土資料は少ない。これは調査事例も少ないが、調査事例があっても須恵器の量が少なく、小破片が多いのも一因である。ま

た、この時期の窯の数も多くないことから、6世紀代の須恵器は主として古墳に供給され、生活レベルへの流通量はまだ少なかったと考えられる。この時期の須恵器は古墳出土品も含めて、融着したもの、ゆがんだもの、亀裂が入っているものが出土する事例がよくある。量的な欠如を補うために失敗品でも使うことができれば使用していた可能性がある。

（3）須恵器生産の展開

～7世紀から8世紀の状況

生産地の動向

7世紀になると猿投窯における生産も拡大し、窯は同心円状に分布地域を広げ、7世紀前葉の東山44号窯期になるとようやく山崎川上流の谷を出て、北に展開するグループと南に展開するグループに分かれる。窯の数も増加して、1時期に何基かの窯が操業するような状況になる。7世紀半ばになると東山丘陵を出て、東に向かい植田川を渡って、岩崎丘陵へ、また後葉になると南に向かい鳴海地区へと進出する。8世紀前半には、折戸、黒笛、井ヶ谷地区とすべての地区に窯が築かれるようになる。ただ、生産内容を見てみると猿投窯では古墳時代通有の蓋杯（杯H）の肩の稜線と回転ヘラケズリが7世紀後半まで残るなど保守的である。

また、7世紀後半には尾北窯篠岡地区（篠岡窯）において、新たに丘陵が開発され、須恵器と瓦、鉄などの生産が始まる（城ヶ谷1996）。この時期における瓦生産は猿投窯では見つかっていないので、新しい技術導入の結果と考えられる。小牧市篠岡2号窯からは奥山久米寺と同范の軒丸瓦が見つかっていることから、中央権力との関わりが考えられる。これに対して須恵器は猿投窯のものとほとんど変わらない特徴を持つことから、おそらく須恵器工人は猿投窯から動員されたものと思われる。尾北窯の製品は飛鳥石神遺跡など飛鳥中枢部にも運ばれ、8世紀前半には一時的に猿投窯を凌ぐ勢いとなる。この背景には律令体制の整備にかかり中央権力の尾張浸透にからんだ諸政策があるものと考

（註3）例えば美濃加茂市尾崎遺跡では6世紀から8世紀にかけての集落における須恵器の産地別変遷が確認できる（斎藤2002）。それによると6世紀前半には猿投窯を含む尾張系須恵器が50%を占め、残りが陶邑窯系であるという。

えている（城ヶ谷 1996）。

周辺地域の状況を見てみると、美濃では6世紀末から7世紀初頭にかけて岐阜県各務原市を中心に美濃須衛窯が形成される。最も古い窯とされるのは蘇原6号窯、須衛65号窯などであるが、さらに古い窯があった可能性も指摘されている。美濃須衛窯は陶邑窯系の技術がもとになって成立したと考えられている（渡辺1996）。その後、7世紀前半までは徐々に生産を発展させ、美濃国内への流通を拡大させていくが、7世紀後半になると窯が急増し、8世紀前半にはピークを迎えるとされる。遠江においては6世紀代から湖西窯が生産を順調に拡大させ、7世紀後半には爆発的に窯が増加し、8世紀前半にかけてやはりピークを迎える。

つまり、7世紀後半から8世紀前半にかけては猿投窯が順調に窯を拡大させるとともに尾北窯、美濃須衛窯、湖西窯各窯が急激に生産を拡大させる。しかし、8世紀半ばになると尾北窯、湖西窯は急速に衰退し、ほとんど窯を築かなくなる。これに対して猿投窯では8世紀後半には各地区で窯場が拡散し、数も増加していく。

消費地の動向

東海地域は7世紀代になっても古墳の築造が盛んで、須恵器も多量に消費される。生産地の動向では7世紀後半には東海諸窯の生産が大きく拡大する。それが流通にどのように影響するのであろうか。

尾張・西三河から出土する須恵器はほとんどが猿投窯系であるが、尾張北西部の美濃との国境に近い地域では7世紀後半から8世紀にかけて美濃須衛窯製品が搬入される。

たとえば、一宮市田所遺跡、大毛池田遺跡、大毛冲遺跡など木曽川左岸に形成された一連の遺跡を見てみると、一宮市大毛池田遺跡からは比較的まとまった資料が出土している（武部編1997）。この遺跡は調査区の東に木曽川水系の支流と思われる自然流路があり、それを利用した水上交通にかかる物資集散地としての性格も考えられている。時期的には7世紀を中心とする古代I期、8世紀前半を中心とする古代II期、8世紀後半から9世紀にかけてを中心とする古代III期に分けられる。古代I期の遺構である溝Cとよばれる自然流路に沿うような形で開削さ

れた溝のなかで、94C区SD03・10からは猿投窯系杯、蓋杯と美濃須衛窯産の杯、壺、甕それに尾北窯産碗が出土しており、7世紀半ばから美濃須衛窯産の須恵器がかなり入ってきていることが確認できる。この傾向は次の古代II期に顕著になる。古代II期の溝Eにあたる94C区SD11下層は8世紀前葉の高蔵寺2（C-2）号窯期ごろのものであるが、美濃須衛窯産の須恵器が量的に猿投窯系の須恵器をしのぐ状況である。また、この中に「美濃国」刻印を持つ須恵器も出土している。「美濃国」刻印須恵器については、美濃須衛窯内の岐阜市老洞窯など数基で焼成されたことが確認されているが、国名の表記の仕方から8世紀初頭の年代が与えられている。刻印須恵器は尾張国内では12遺跡が確認されているが（早野2006）、ほとんど一宮市、江南市の木曽川沿いの地域で、この時期の美濃須衛窯製品の分布を象徴するような出土状況である。

濃尾平野中心部や熱田台地などについてみると、同時期の清須市清洲城下町遺跡、名古屋城三の丸遺跡、元興寺遺跡など、各時期を通じて美濃須衛窯産の須恵器はほとんど見られないことから、尾張北西部に限られた状況であろう。その後、古代III期、8世紀後半になると木曽川左岸地域の美濃須衛窯産須恵器は減少し、再び猿投窯製品が優位に立つようになる。

東三河では6世紀後半から湖西窯が主体となるが、この傾向は7世紀になっても変わらない。豊橋市市道遺跡、三河国府周辺の豊川市白鳥遺跡群などの出土状況を見てみると、7世紀から8世紀前半までは湖西窯が主体であるが、8世紀後半になると猿投窯製品の割合が増加する。

須恵器生産と流通の背景

以上、須恵器の生産と流通について見てきた。ここではその背景について考えてみたい。

まず、須恵器生産開始前後の状況であるが、5世紀前半に遡る県内最古の須恵器の一群が出土するのは、いずれも名古屋市南西部の熱田台地とその周辺である。熱田台地は伊勢湾に臨み、台地の南端には断夫山古墳や熱田神宮がある。断夫山古墳は6世紀初頭の東海地方最大の前方

後円墳であり、尾張国造尾張氏の首長墓であるといわれている。さらにその南には後に尾張氏が代々大宮司をつとめた熱田神宮がある。このように熱田台地は尾張国造尾張氏と関係の深い土地であり、しかもその中枢部であった。新しい焼き物である韓式系土器や須恵器も日本における生産開始当初から、いち早くもたらされたことは十分想定できることである。

東山111号窯開窯以前、このような新しい焼き物の搬入とほぼ時を同じくして尾張でも須恵器生産が始まり、熱田台地の政権中枢部を中心に供給されたものと思われる。それと伊勢山中学校遺跡SK109出土の格子タタキを持つ甕と志賀公園遺跡SU13出土の縄蓆文を持つ甕は形態や胎土に共通する点があり、猿投窯産の可能性もあるが、典型的な猿投窯の胎土に比べて白色砂粒の入り方など若干違いを持っている。搬入品とも考えられるが、もし尾張産であれば山崎川上流ではなく、熱田台地の近辺に窯が築かれた可能性もある。なお、須恵器生産開始にあたり、土師器高杯と同じ形の須恵器が見られることから、須恵器生産に土師器製作者が何らかの形でかかわっていたことは間違いない。

H111号窯期になり、確実に山崎川上流に窯が築かれる。しかし、窯の数は少なく、その生産と流通は尾張氏の管理のもとにあったと思われる。その製品は伊勢山中学校遺跡など中枢部では一般的な大きさの豊穴住居からも出土することから、生活レベルで供給されていたものと思われる。それ以外の地域では尾張、西三河などの拠点的な集落に韓式系、陶邑窯系に混じって点的にもたらされる。これらの須恵器は生活レベルではなく、祭祀等特別な用途に用いられることが多かったものと思われる。

5世紀後半から6世紀には猿投窯以外に各地に猿投窯系、陶邑窯系の小規模な窯場が派生し、各地に須恵器が普及する。しかし、6世紀後半になると尾張や遠江では派生的な窯が終焉を迎える、猿投窯、湖西窯にそれぞれ生産が集約されるとともに、埴輪併焼が見られなくなる。この頃には猿投窯は尾張から西三河にかけての流通域を独占し、伊勢北部から美濃にもかなり流通し、濃尾平野を取り巻く地域全体に製品を供給していたと考えられる。それにもかかわらず、

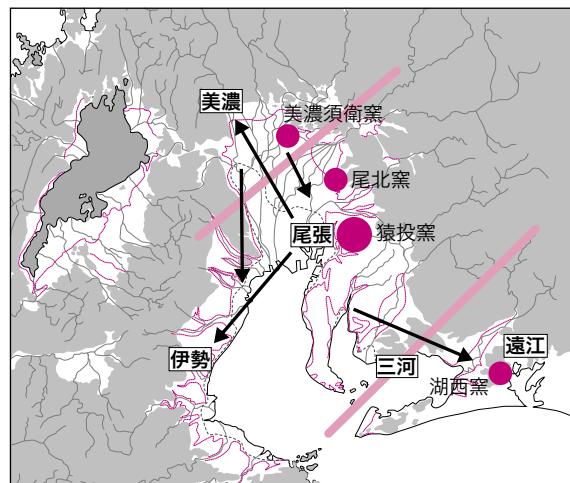


図8 7・8世紀の東海諸窯の流通圏

猿投窯の窯場は東山地区内に留まり、窯の数もさほど増えたとは思われない。従って、生産された須恵器は主に古墳への副葬品として供給され、生活レベルでは量的には充分ではなかったと推察される。多少の破損や変形したものでも使い続けることにより、廃棄される量は少なくなる。それが、この時期の資料的な少なさにつながっているのではないだろうか。その背景としては猿投窯の生産体制が保守的で、増大する需要に対応しきれなかったことが考えられる。須恵器が欠乏するという程ではなかったが、供給が潤沢にあったとは思えない。このような慢性的な不足状態が、7世紀の各地の窯の急激な拡大を生む背景になったものと思われる。

東三河では基本的には在地産、6世紀後半からは湖西窯の製品が主体を占め、猿投窯は混じる程度である。

流通圏として大きく見ると濃尾平野から西三河を含む猿投窯エリアと東三河から遠江西部を中心とする湖西窯エリアに分けられる可能性がある。

7世紀後半、猿投窯では同心円状に窯が拡散し、東山丘陵を出て、東や南に拡散する。8世紀にはさらに尾張東部のいくつかの丘陵へ窯を展開させるようになる。しかし、生産される器種等を見ると依然として保守性を保っている。また、尾張北部に尾北窯を派生させる。美濃では7世紀後半から美濃須衛窯で窯が増加し、美濃国内のシェアを伸ばす。それとともに、美濃

須衛窯の製品は木曽川を越え、尾張北西部にもたらされる。ただし、この状態は尾張国の北西部に限定され、木曽川から離れると割合が減少し、尾張中央部に至るとほとんど美濃須衛窯製品は入らない状況である。美濃には美濃須衛窯、尾張・西三河では猿投窯、東三河・遠江では湖西窯という3つのエリアが形成される。おそらく、生活容器として須恵器が充足するようになったのが7世紀後半以降である。その現れとして、このころから遺棄された竪穴住居を廃棄土坑として、完形に近い須恵器を廃棄する事例が見られるようになる。

8世紀後半になると尾北窯、湖西窯は急速に衰える。美濃須衛窯もピークを過ぎる。それにはかわって猿投窯が窯場を拡大させ、国境を越えて三河領域にも窯を築き、広大な分布域を持つようになる。それにより、安定した燃料の確保が可能になったと思われ、窯の数も急増する。製品も古い様相は払拭され、均質で画一的なものとなる。流通面でも尾張北西部や東三河においても猿投窯が主体となり、県内は猿投窯製品で統一される。

おわりに

猿投窯とはどのような窯なのか、灰釉陶器を生み出す背景は何であったのか、生産と流通から猿投窯の実力を考えてみる予定であったが、後半の時期については十分検討できなかった。

5世紀前半に開窯し、古代を通じて生産を継続させた窯は全国でも猿投窯のみである。良質の陶土の存在も一因であろうが、生産を支える基盤はかなり強固なものであったものと思われる。古墳時代においては国造尾張氏の関与、律令期には中央政権の関与が大きかったと思われる。尾張氏は早くから伊勢湾の最奥部を押さえ、木曽川や長良川などの水系を管理し、濃尾平野の生産と物流を握っていたものと思われる。それには須恵器生産の分野も含まれ、長く尾張氏の管理が続いたものと思われる。その結果、伝統が長く保持され、さほど品質の低下をまねくこと無く生産を継続させることができたものと思われる。7世紀後半から8世紀前半にかけて、中央権力の地方進出により、須恵器生産も再編

成されることになる。その第一段階が7世紀後半の尾北窯の形成である。ただこの時期には猿投窯は保守性を保っている。第2段階が8世紀半ばの尾北窯の衰退と猿投窯の計画的拡散（城ヶ谷1998）である。この一連の流れのなかで猿投窯の保守性は打破され、より整備された新しい生産体制が確立し、それが灰釉陶器生産につながっていくものと考えている。

参考文献

- 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸式・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号
愛知県埋蔵文化財センター
荒木実 1994 『東山古窯址群』
石黒立人編 1999 『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集
木村光一編 1996 『伊勢山中学校遺跡（第5次）』名古屋市埋蔵文化財調査報告書24
木村有作 1999 「名古屋台地西縁の集落遺跡と東山窯」『同志社大学シリーズVII 考古学に学ぶ』
小林久彦 1994 「一宮町念佛塚古墳群の検討」『三河考古』7
小林久彦 1999 「消費地の状況（三河）」『古墳時代の猿投窯と湖西窯』三河考古刊行会
斎藤孝正 1983 「猿投窯成立期様相」『名古屋大学文学部研究論集 史学29』名古屋大学文学部
斎藤孝正 1995 「東海西部」『須恵器集成図録』第3巻東日本編I
斎藤基生ほか 2002 『尾崎遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会
鈴木敏則 1994 「遠江の尾張系埴輪」『転機』5号
城ヶ谷和広 1996 「律令体制の形成と須恵器生産～瓦陶兼業窯の展開～」『日本考古学』第3号
城ヶ谷和広 1997 「東海地方における古代の土器生産と流通（予察）」『古代の土師器生産と焼成構造』真陽社
城ヶ谷和広 1998 「猿投窯における須恵器生産の展開～分布の問題を中心に」『植崎彰一先生古希記念論文集』真陽社
武部真木編 1997 『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集
永井邦仁編 2005 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第108集
永井宏幸編 2001 『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集
植崎彰一 1958 「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論文集』
植崎彰一・斎藤孝正 1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告 III』愛知県教育委員会
成瀬正勝編 2000 『砂円遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集
服部哲也 2003 『伊勢山中学校遺跡（第10次）』名古屋市埋蔵文化財調査報告書62
早野浩二 2005 「ミヤケの地域的展開と渡来人」『考古学フォーラム』17
早野浩二ほか 2006 『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集
森泰通 2001 『神明遺跡II』豊田市教育委員会
渡邊博人 1996 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相」『美濃の考古学』創刊号